

「仕事と余暇について」

小山 茂

(川崎市消防局長)

国民生活審議会は、1990年、「豊かな時を創るために新しい余暇社会と生活文化の創造に向けて」と題した報告書の中で、日本の余暇生活の著しい立ち遅れを指摘し、余暇の充実とは日本が将来、真に豊かで人間的な社会に発展するための最大の課題であると位置付けしており、NHK世論調査部による「日本人の意識」調査(1988年)でも「仕事か、余暇か」という二者択一的な考え方ではなくて、「仕事も余暇も」というように生活の中で余暇は仕事とともに大切なものであるという考え方が増えてきていることが指摘されているところである。

このような世論調査の結果をみるまでもなく、我々消防界の中でも、それぞれの年代層別に緩やかではあるが確実に職員の意識に変化が生じているようであり、特に若い職員ほど意識の変化が顕著なようである。

長い間、日本人は誰もがひたすら働いてきた。そして「経済大国」となった現在でも、日本人の年間労働時間は依然として先進国では最長の2,100時間台である。

かつては、「日本人は勤勉だ」というプラスイメージとしての海外の評価があり、「勤労は美德である」という意識は当然のこととして全国民に定着していたのであるが、近年における欧米先進諸国との経済摩擦の激化の中、一転してこの意識が批判の対象となっているのである。

政府では、宮沢首相が就任時の所信表明演説で強調した「生活大国を目指す」を旗印に、新しい経済五ヶ年計画(92～96年度)において、この期間中の1,800時間達成を明記し、国が先頭にたって“時短”を実現していくとしており、関係省庁を中心に大企業では有給休暇の活用をいれるとともに、「大型休暇制度」の試行に踏み切るなど、「働きすぎ」批判に善処施策を打ち出されているが、我々の消防界でも「週休2日制」の導入など人員増の極めて厳しい社会情勢の中で、これら社会的要請に答える形で制度的な面からのアプローチが進められている昨今である。

余暇が、単純に余った時間として消極的に位置付けられる時代は既に過去のものとなっているという意識の改革を図るべきであり、働くときは働き、休むときは休むというメリハリのきいたライフスタイルを確立し、常に楽しみの展望を持ち、仕事も余暇も最善に過したいものと思う。

したがって、余暇時間の使い方も、単なる休息ではなく、家族とともに広く充実を求めていくように各自がより良く配慮するべきであろう。

「時は、よく用いる者には親切である」と言ったのは、ドイツの哲学者ショーペンハウエルであるが、いくら余暇が増えても有効に活用できなければ全く意味がないのであって、どう間違っても「粗大ゴミ」「ぬれ落ち葉」「産業廃棄物」などの冗談を言われることのないように、自分流の方法で積極的に素晴らしい時間づくりをしてもらいたいと思う次第である。